

商売繁盛の守り神：4世紀

—PGM IV. 3125-3171—

前野 弘志

1. はじめに

この小冊子は『ギリシア語魔術パピルス』の翻訳と註釈の試み第3弾である。今回のテーマ（付録）は「月の満ち欠け」とした。魔術パピルスを読んでいると、月の満ち欠け（位相 or 月相）や位置に関する記述にしばしば出会う。その理由は、ある魔術を行うには、それに相応しい日や時間帯があるとされ、それが月相や月の位置に関する言葉で表現されたからである。従ってある魔術が何日の何時頃に行われたのかを正確に知るためには、月に関する正しい基礎知識が不可欠である。古代の人々にとって月の動きは、いわば生活感覚として身に付いていたのであろうが、月を見上げることさえ稀になった現代人には、必ずしも自明のことではないのである。但し、ホロスコープに関すると思われる月の表現については、別な機会に論じるので、ここでは除外した。

2. 文書情報

表題の魔術文書「商売繁盛の守り神」（PGM IV. 3125-3171）⁽¹⁾が記されているのは⁽²⁾、ギリシア語魔術パピルス IV 巻（その長大さから「パリ大魔術パピルス」とも呼ばれる）で、パリ国立図書館に所蔵されている（*P. Bibl. Nat. Suppl.* gr. no. 574）。これは表裏両面に書かれた36枚のフォリオで構成される冊子（全3274行）であり⁽³⁾、大きさは縦27-30.5cm 横9.5-13cm、書式は *transversa charta*⁽⁴⁾である。書かれた年代は4世紀、アナスタシがテーベで発掘し、初版は1888年である⁽⁵⁾。当該文書はフォリオ34の表面（3125-3134行）から裏面（3135-3171行）にかけて記載されている⁽⁶⁾。原文・翻訳・註釈は *PGM*, Bd.I, S.174-177; *GMP*, p.98-99を利用した。構成は【1】説明（3125-3130行）、【2】作り方（3130-3146行）、【3】儀式（3146-3156行）、【4】呪文（3156-3164行）、【5】祈願文（3165-3170行）、【6】効果（3170-3171行）。商店や神殿に商売繁盛をもたらす守り神の像の作り方と、それを起動させるための儀式の方法が記されている。

3. 試訳

以下の試訳に付された【】数字は原文にはなく、構成をわかり易くするために訳者が付したものである。また（ ）内の言葉や「 」は、意味を分かり易くするために訳者が補ったものである。

【1】ある場所であれ神殿であれ、訪れた人々が驚嘆するほどに、その場所が大いに栄えているのを、いやしくも（あなたが）見る時には常に、そこにはこの守り神が置かれている。実際にもしそれが置かれた所が、もしも神殿であるならば、その神殿は世界中で評判になるだろうし、またもしも他の場所ならば、（そこは）大いに栄えるだろう。さてその作り方は次の通り。【2】エトルリア産のロウを用意して、3パライスターの（大きさの）人形をこねて作りなさい。首を三つ作りなさい。真ん中の首は海のアヤブサの（首）、右の（首）はヒビの（首）、左の（首）はトキの（首）です。また四枚の翼は拡げた状態にきなさい。二つの手は胸の前に付けて、王笏を握らせなさい。またそれをオシリスのように包帯で巻きなさい。アヤブサはホルスの冠を、ヒビはヘルマヌビスの冠を、トキはイシスの冠を被らせなさい。またその体内に磁鉄鉱の心臓を埋め込みなさい。そして神官用パピルスに次の名を書きなさい。そして（それを）その体内に入れなさい。それからそのために鉄の台を作り、それをその台の上に立てなさい、そしてそれをモミの神棚に納めなさい、三日目にある女神の昇る時に。【3】そしてそれを好きな場所に据えてから、それに額が白い野生のロバを捧げなさい、そして（それを）焼き尽くしなさい。またそれに、初めて子を産み初めて乳を与えた黒牛の乳を注ぎなさい。そしてそれと共に食事して、体内に納められたパピルスに書き込まれた名を、それに向かって一晩中歌いなさい。またその神棚にオリーブの冠を載せなさい。かくて（あなたは）一生、成功するでしょう。またその同じ呪文をもう一度、夜明けに目を覚まして、開店前に歌いなさい。【4】さて、書かれそして唱えられる名は以下の通り。

「ビコー	ムール	スーマルタ
ビコービ	スールフェオー	アケーモルトーウート
コービベウ	ムーレート	アニミ
ナススーナインティ	アニモケオー	ミムヌーエール
ヌータイト	アルパエール	イエーリ
	サニ	アニミ
		ミムニメウ。」

【5】「私に全ての愛顧、全ての成功を与えて下さい。なぜならば運命の女神の眷属

である幸運をもたらす天使が私とともにあるからです。それ故にこの家に収入、成功を与えて下さい。げに、希望の主人よ、富を与えるアイオーンよ、聖なるアガトス・ダイモンよ、全ての愛顧とあなたの託宣を成就させて下さい。【6】そうしてから開店下さい。すると（あなたは）無比なる神の力に腰を抜かすことでしょう。

4. 註釈

【1】説明

「ある場所であれ神殿であれ、訪れた人々が驚嘆するほどに、その場所が大いに榮えているのを、いやしくも（あなたが）見る時には常に、そこにはこの守り神が置かれている。実際にもしそれが置かれた所が、もしも神殿であるならば、その神殿は世界中で評判になるだろうし、またもしも他の場所ならば、（そこは）大いに榮えるだろう。さてその作り方は次の通り。」（3125-3131行）。この訳は敢えて原典に忠実な訳にはせず、大胆にも一部改変している。それ故に *PGM* や *GMP* の訳とも異なる。

PGM が編集したテキストは、次の通りである。Ἐπὸν δὲ ποτε θέλῃς τόπον εὐπορεῖσθαι μεγάλως, ὥστε θαυμάσαι τοὺς ἐπὶ τῷ τόπῳ ἢ τῷ ἱέρῳ, ὅπου ὑπόκειται τὸ φυλακτήριον· ὅπο[υ] γὰρ ἔαν τοῦτο τεθῇ, ἔαν μὲν ἐν ἱερῳ, ἔσται τὸ ἱερὸν λαλητὸν καθ' ὅλην τὴν οἰκουμένην, ἔαν δὲ ἐν ἄλλῳ τόπῳ, μεγάλως πράξει — ἔστιν οὖν ἡ ποίησις αὐτοῦ αὕτη· (3125-3131行)。

これを *PGM* は Willst du einmal, daß ein Ort großes Glück habe, so daß die an dem Ort oder an dem Heiligtum, unter dem das Schutzmittel liegt, staunen — denn wohin es gelegt wird, sei's an einem Heiligtum, wird man von ihm sprechen auf der ganzen bewohnten Erde, sei's an einem andern Ort, wird er großes Glück haben — so fertigt man das Mittel folgendermaßen: と訳している (S.175)。その直訳的な日本語は「もしあなたが一度でも望むならば、ある場所が大きな幸福を持つように、このお守りがある場所や神殿を訪れた人々が驚嘆するために（ほどに）、— というのはそれが置かれた場所が、神殿であれば、それについて世界中で話題になるだろうし、何か他の場所であれば、それは大きな幸運を持つだろうから、— それ故に、そのお守りは以下のようにして作られる」となるだろう。

一方 *GMP* の訳は Whenever you want a place to prosper greatly, so that those in the place or the temple where the phylactery is hidden will marvel, [use this rite]. For wherever this [phylactery] be placed, if in a temple, the temple will be talked about throughout the whole world; if in some other place, [the place] will prosper greatly. This is how to make [the phylactery]: である (p.98)。その直訳

的な日本語は「あなたがある場所を大いに栄えさせたいと願う時はいつでも、このお守りが隠されている場所や神殿を訪れた人々が驚嘆するために（ほどに）、[この儀式を使え]。というのもこの[お守り]が置かれている所はどこでも、もし神殿の中であれば、その神殿は世界中で話題になるだろうし、もし何か他の場所であれば、[その場所は]大いに栄えるであろうから。これがそのお守りの作り方である」となるだろう。

*PGM*の訳と*GMP*の訳は基本的に同じである。これらの訳と筆者（前野）の訳には2点の違いがある。第一は、条件文を受ける文章である。*GMP*は条件文 Whenever you want「あなたが願う時はいつでも」を受ける文章として、命令文 [use this rite]「この儀式を使え」を補った。一方*PGM*は条件文 Willst du「あなたが願うならば」を受ける文章として、結果文 so fertigt man das Mittel folgendermaßen「それ故に、そのお守りは以下のようにして作られる」を無理矢理につなげた。この条件文を受ける文章の不在と関連して、第二は、ὅπου ὑπόκειται τὸ φυλακτήριονの解釈である。*PGM*も*GMP*もὅπουを関係副詞として、先行する ἐπὶ τῷ τόπῳ ἢ τῷ ἱέρῳ「場所であれ神殿であれ」に掛けた。しかしὅπου ὑπόκειται τὸ φυλακτήριονこそ、先行する条件文を受ける文章なのではないだろうか。

条件文とそれを受ける文章が明確に対応していない点が、この文章の最大の難解さであり欠点である。では、なぜこのような文章になってしまったのだろうか。筆者が考えるに、もしかしたら、この文章を書いた魔術師の頭の中には二つの文章があり、それらを十分に練らずに一つの文章にしたことが、文章をねじれさせてしまった原因ではないだろうか。そこで、この文章の構成要素をモジュール（取り換え可能な単語のグループ）に分解して（下図の枠 M1～M6がそれぞれのモジュールである）、互いにもつれ合ったであろう、二つの文章を再現してみたい。この文章はコンマによって三つに区切られているので、それら一つ一つについて見ていく。

①は想定される「第一章」に属するモジュールである。②は想定される「第二章」に属するモジュールである。M3、M4、M6は両方の文章に属する共通のモジュールである。ゴシック体で書かれたモジュールをたどっていくと、*PGM*の原典テキストになる。明朝体で書かれたモジュールは、筆者（前野）が想定した作文である。表を見れば分かるように、ねじれの原点はM2である。何故ならば、ここだけ①と②の上下関係が逆さまになっているからである。そこでまず、M2②「(商売繁盛を) いやしくも (あなたが) 願う」という条件文を核として文章を構成するならば、その接続詞はM1②「ならば」で、それを受ける結果文はM5②「そこに (この守り神を) 置きなさい」にならねばならない。次に、M2①「(商売繁盛を) いやしくも (あなたが) 見る」という条件文を核として想定すると、その接続詞はM1①「時には常に」で、それを受ける結果文はM5①「そこには (この守り神が) 置かれている」とならねばならない。このように①モジュールだけ、および②モ

ジュールだけで文章を作ると、すっきりとした二つの文章が出来上がる。

M1	M2	M3
① Ἐπὶ δέ	② ποτε θέλῃς	①② τόπον εὐπορεῖσθαι μεγάλως,
② Ἐὰν δέ	① ποτε βλέπῃς	

M4
①② ὥστε θαυμάσαι τοὺς ἐπὶ τῷ τόπῳ ἢ τῷ ἱερῷ,

M5	M6
① ὅπου ὑπόκειται	①② τὸ φυλακτήριον·
② ὅποι θές	

①モジュールだけからなる「第一文章」の訳（表訳）は冒頭に示したので、②モジュールだけからなる「第二文章」の訳（裏訳）をここに示そう⁽⁷⁾。「ある場所であれ神殿であれ、訪れた人々が驚嘆するほどに、その場所を大いに栄えさせたいと、いやしくも（あなたが）願うならば、そこにこの守り神を置きなさい。」〈以下同文〉（3125-3131行）⁽⁸⁾。

冒頭の Ἐπὶ δέ に接続を表す δέ が付いていることから⁽⁹⁾、この文章の書き手の頭の中では、この文書に先行する文書との繋がりが意識されていたようである。末尾の ἔστιν οὖν ἡ ποίησις αὐτοῦ αὕτη にある αὕτη は、辞書的には、既に述べたことを指すが⁽¹⁰⁾、ここでは次に述べることを指している。この文章に類出する「場所」は、文脈から判断して、具体的には商店や神殿を指すのだろう。商店と神殿が同列に扱われているところが面白い。確かにどちらも人気商売である。ここで「守り神」と訳した φυλακτήριον という語は、PGM VII.579では「護符」、PGM VII.857では「結界」の意味で使われている。

【2】作り方

まず「エトルリア産のロウを用意して、3バライステーの（大きさの）人形をこねて作りなさい。」λαβὼν κηρὸν Τυρρηνικὸν πλάσον ἀνδριάντα παλαιστῶν γ´. (3131-3132行)。「ロウ」は養蜂における副産物であり、安価なものであった。様々な用途があったが、中でもこの文脈と関係があるのは、天然樹脂として塑像に利用された点である。子供のオモチャ、人形、神像 (Plin. Ep, 7, 9, 11)⁽¹¹⁾、胸像、実物大の塑像などが作られた⁽¹²⁾。大プリニウスは最上級の蜜蠟としてカルタゴ産、次にポントス産、次にクレタ産、次にコルシカ産を挙げているが (Plin. HN, 21, 83-85)⁽¹³⁾、

エトルリア産については言及がない。従って「エトルリア産のロウ」は高価なものではなかったようである。パライステーは長さの単位で、1パライステーは指4本分の幅（約7.5cm）を指すので⁽¹⁴⁾、「3パライステー」は約22.5cmである。「こねて作りなさい」と訳した語 πλάσσω = πλάττω は「造形する」の意味であるが、特に「こねて作る」というニュアンスがある⁽¹⁵⁾。

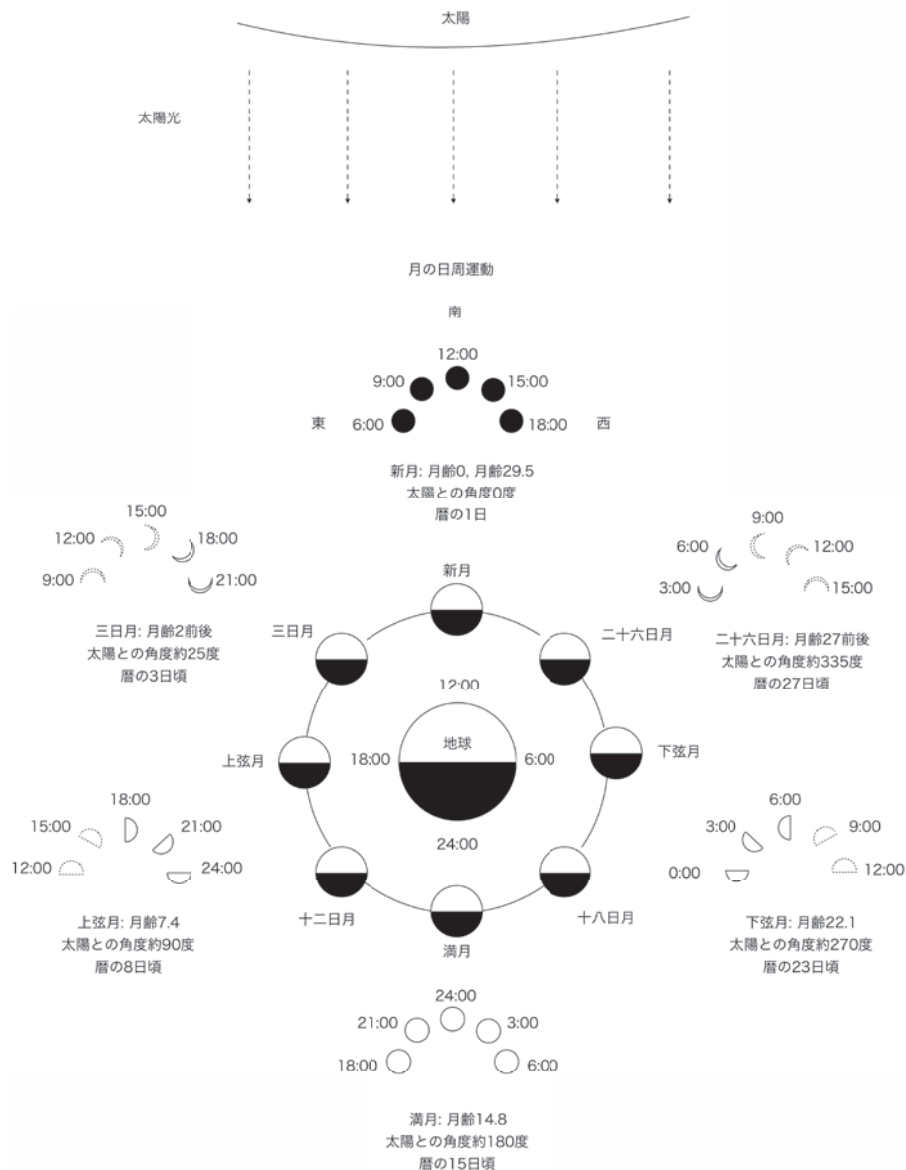
次に「首を三つ作りなさい。真ん中の首は海のハヤブサの（首）、右の（首）はヒヒの（首）、左の（首）はトキの（首）です。」 ἦτω δὲ τρικέφαλος· ἡ μέση κεφαλὴ ἦτω ἰέρακος πελαγίου, ἡ δὲ δεξιὰ κυνοκεφάλου, ἡ δὲ ἀριστερὰ ἴβωρος. (3133-3135行)。「首を三つ作りなさい」 ἦτω δὲ τρικέφαλος の直訳は「（それをして）三つ首たらしめよ」である。首が三つの人形はかなりシュールである。「海のハヤブサ」とは、おそらくミサゴ（学名 Pandion haliaetus、英語 Osprey、通称 Sea-hawk、Fish-hawk など）のことだろう。この鳥はタカ科に属し、体長50から66cmほどで、海辺や湖、河口付近に住み、魚を好んで食べる⁽¹⁶⁾。大プリニウスによれば、ラテン語では ossifraga と呼ばれ、非常に目がよく、高度の上空から海中の魚を見つけると急降下して捕食するという (Plin. HN, 10,8)⁽¹⁷⁾。ハヤブサはホルス神の姿である⁽¹⁸⁾。「ヒヒ」は、書記、知識、魔術、そして月の神であるトト神の一つの姿、「トキ」はもう一つの姿であり、トト神は王権をめぐるホルス神とセト神の仲介をしたとされる⁽¹⁹⁾。

次に「また四枚の翼は拡げた状態にしなさい。」 ἐχέτω δὲ ἐξηπλωμένα πτερὰ τέσσαρα, (3135-3136行)。「四枚の翼」とはハヤブサとトキの翼を合わせた数である。「二つの手は胸の前に付けて、王笏を握らせなさい。」 ἐκτεταμένα<ς> τὰς δύο χεῖρας ἐπὶ τῷ στήθει, ἐν αἷς κρατεῖτω Κράτος. (3136-3137行)。χείρ は「手」であるが、腕を含めていう場合もある⁽²⁰⁾。そして「二つの手」はヒヒの手である。「付けて」と訳した ἐκτεταμένα<ς> という語の本来の意味は「伸ばして」であり、PGM は gebreitet (S.175)、GMP は stretched (p.98) と訳している。しかし「手は腕の前に伸ばして」は、日本語として不自然なので、「手は胸の前に付けて」と訳した。この状態を GMP は、腕をクロスさせていると考えているが (p.98, n.418)、おそらくそうではないことが続く文章から分かる。「またそれをオシリスのように包帯で巻きなさい。」 αὐτὸς δὲ ἔστω περιεσταλμένος ὡς Ὅσιρις. (3137-3138行)。つまりこの守り神は、三つの首を除いてオシリスの姿をしているのである。オシリスの図像を検索したところ、腕をクロスさせたものは見当たらず（有名なツタンカーメンの黄金の棺は別として）、いずれも二つの拳を付き合わせるようにして、両腕を胸の前に付けている。そして二つの手にはそれぞれ王権の象徴としてハエ払いに由来する「殻竿（ネケク）」と先端が湾曲した「王笏（ヘカ）」を握っている⁽²¹⁾。また「包帯で巻きなさい」の原語は περιεσταλμένος で、意味は「包む、着せる」であるが、オシリスはミイラの姿をしているので、そのように意識した⁽²²⁾。

それから「ハヤブサはホルスの冠を、ヒヒはヘルマヌビスの冠を、トキはイシスの冠を被らせなさい。」ἐχέτω δὲ ὁ μὲν ἱέραξ βασιλείον ὄρου, ὁ δὲ κυνοκέφαλος βασιλείον Ἑρμανούβιδος, ἡ δὲ ἴβις ἐχέτω βασιλείον ἰσίδος. (3138-3141行)。「ホルスの冠」は上下エジプトの二重冠で⁽²³⁾、ハヤブサの頭をしたホルス神は王権の守護神とされ⁽²⁴⁾、ファラオはホルス神の化身とされた⁽²⁵⁾。またその右目は太陽、左目は月とされ⁽²⁶⁾、王権をめぐるセトとの戦いで奪われた目をイシス女神が癒したので、「ホルスの目（ウジャド）」は護符とされる習慣があった⁽²⁷⁾。「ヘルマヌビスの冠」のヘルマヌビスとは、ヘルメス神とアヌビス神の合成語で⁽²⁸⁾、ヘルメス神をギリシア人はエジプトのトト神と同一視した⁽²⁹⁾。アヌビス神は冠を被っていないが、山犬の頭をしており⁽³⁰⁾、セト神によってバラバラにされたオシリス神の体をイシスの依頼でミイラにして蘇らせた⁽³¹⁾。「イシスの冠」は玉座の形をしており、イシス女神はオシリス神の妹かつ妻でホルス神の母、そして魔術の女神である⁽³²⁾。後にハトホル（「ホルスの家」の意味）女神と同一視されるようになり⁽³³⁾、太陽と王の母とされ⁽³⁴⁾、ハトホル女神のように日輪を頭上に頂くようになった⁽³⁵⁾。オシリス神は、豊穡の神、復活の神、冥府の王である⁽³⁶⁾。つまりこの三つ首の守り神は六柱の神々（オシリス、イシス、ホルス、ヘルマ・ヌビス、トト）の合成であり、いずれもオシリスとその仲間たち、地上と冥府の支配者、太陽と月の神、知恵と魔術の神である。

そして「またその体内に磁鉄鉱の心臓を埋め込みなさい。」βάλε δὲ ἐν τῇ κοιλίᾳ αὐτοῦ καρδίαν μαγνητίνην, (3141-3142行)。「磁鉄鉱」μαγνητίνηνとは天然磁石のことであり、磁石は鉄を引き付けるので、客を引き付けることの類感なのだろう⁽³⁷⁾。「そして神官用パピルスに次の名を書きなさい。」καὶ εἰς πιττάκιον ἱερατικὸν γράφε τὰ ὀνόματα ταῦτα (3142-3143行)。πιττάκιονをPGMはTäfelchen「小さな札」と訳し(S.175)、GMPはpapyrus「パピルス」と訳した(p.99)。πιττάκιονの基本的な意味は「書き板、紙片、札」であり、素材は必ずしもパピルスとは限らない。しかしこのテキストには「神官用」ἱερατικὸνという形容詞が付いているので、魔術パピルスにしばしば見られる「神官用パピルス」を指すものと考えた。

「そして（それを）その体内に入れなさい。」καὶ ἔνθεας αὐτοῦ εἰς τὴν κοιλίαν, (3143行)。「（それを）」とは、神の名が書かれた神官用パピルスのことである。「それからそのために鉄の台を作り、」καὶ ποιήσας αὐτῷ βάσιν σιδηρᾶν (3144行)。この「鉄の台」は先述の「磁鉄鉱」と対になっているのだろう。「それをその台の上に立てなさい、」στήσον αὐτὸν ἐπὶ τῆς βάσεως (3144-3145行)。「そしてそれをモミの神棚に納めなさい、」καὶ ἔνθεας αὐτὸ εἰς ναῖσκάριον ἀρκεύθινον (3145-3146行)。最後の三つの文に出てきた「それ」とはいずれも、三つ首の守り神の像を指している。ἀρκεύθινοςは、Liddell & Scottによれば、of juniper「トシヨウ製の」、of fir「モミ製の」などの意味があり、おそらく後者の意味だと考えられる。大プリニウス『博



物誌』(Plin. *HN*)を調べると「モミ」abiesは、常緑樹で(16, 80)、細工しやすく(16, 48)、水中で腐りにくいので(16, 221)、造船用に適し(16, 41; 16, 201)、船の帆柱や丸材に向いており(16, 195)、何よりもあらゆる象嵌細工や指物材具に適している(16, 225)とある⁽³⁸⁾。従ってモミの木は神棚などを作るには最適の材料だったことが分かった。「神棚」ναϊσκάριονはνάϊσκοςの指小語で、νάϊσκοςはναός「神殿」の指小語なので、神殿のように三角の破風を持った小さな「神棚」がイメージされる。続いて、三つ首の神像をモミの神棚に納める時刻が指定されている。「**三日目にある女神の昇る時に。**」ἐν ἀνατολῇ τριταίας οὐσης τῆς θεοῦ, (3146行)。少し謎めいた表現である。「女神」とは月の女神セレネを指すので⁽³⁹⁾、この文章は月の満ち欠けと月の位置による時刻表現である。ではこの表現は何日の何時頃を指しているのだろうか。魔術文書には魔術を行うタイミングとして月に関する記述が多く、月の知識がないと正しく理解できない。そういう訳で月の基礎知識について、ここでおさらいしておこう。図版を見ながら以下の解説を読んでもらいたい⁽⁴⁰⁾。

1) 太陰暦

ローマ帝国では前45年にユリウス暦(太陽暦)が採用されたが、魔術は依然として太陰暦に基づいて行われていた。太陰暦とは月の満ち欠け(位相)と暦の日付を一致させるように作られた暦のことである⁽⁴¹⁾。つまり空を見上げて月の形を見れば、今日は何日頃かが分かるような暦である。

2) 位相

では月の位相はどのような仕組みで周期的に変化するのだろうか。それは視点である地球を要とした月と太陽の角度によって決まる。まず光源である太陽は動かないものとする。月も地球も太陽から光を受け、太陽の側は明るく、反対側は暗い。地球は反時計回りに自転して、約6時間ごとに朝、昼、夕、夜が生じる。便宜上、朝は6:00から、昼は12:00から、夕は18:00から、夜は24:00からとしておこう(もちろん季節と場所によって大きく異なるが)。月は地球の周りを反時計回りに公転している。月の公転周期は約27.3日である。因みに月の自転周期も同じ約27.3日なので、月は常に地球に向かって同じ面を見せている。月の明暗界線(つまり月の明るい部分の輪郭線)は、毎日12度ずつ移動して、見た目の月の形(位相)を変える。

3) 新月

この月は地球から見て太陽と同じ方向にある。つまり地球を要とした太陽と月の角度は0度である。この月の日周運動は、朝に太陽とともに昇り、昼に太陽とともに南中し、夕に太陽とともに沈む。従って新月は空に出てはいるが、常に太陽の逆光を浴びているので目には見えない。この日が暦の1日となる。これは生まれたば

かりの月なので月齢は0である。月齢とは新月から数えた日数のことである。この日以降、月は明暗界線の幅を広げ、次第に満ちていく。

4) 三日月

この月は暦の三日頃の月で、月齢は2前後である。月は1時間に15度ずつ西に移動するが、月の出の時刻は毎日、約50分ずつ遅くなり⁽⁴²⁾、太陽との角度は毎日、約12度ずつ開いていく。その結果、月は毎日、約12度ずつ星々に対して東に移動しているように見える。三日月の太陽との角度は約25度である。三日月の日周運動は、朝9時頃に昇り、15時頃に南中し、21時頃に沈む。三日月は日没後30分ほどで明るく輝き始め、それから約1時間で沈む。

5) 上弦月

この月は暦の8日頃の月で、月齢は7.4である。いわゆる半月であり、月の右半分が明るく、左半分が欠けている。12時頃に昇り、18時頃に南中し、24時頃に沈む。太陽との角度は90度である。この月は昼間でも東の空に薄っすらと見える。

6) 満月

この月は暦の15日頃の月で、月齢は14.8である。18時頃に昇り、真夜中に南中し、明け方頃に沈む。つまり月が東に昇ると同時に日は西に沈むことになる。太陽との角度は180度で、太陽と反対の方向にある。この日以降、月は明暗界線の幅を狭め、欠け始める。太陽との角度は数字的には広がるが、実質的には狭まっていく。

7) 下弦月

この月は暦の23日頃の月で、月齢は22.1である。これも半月であるが、反対に左半分が明るく、右半分が欠けている。24時頃に昇り、6時頃に南中し、12時頃に沈む。太陽との角度は270度（90度）である。この月は午前中に西の空に薄っすらと見ることができる。

8) 朔望月

既に述べたように、月は毎日50分ほど昇る時間が遅れ、太陽との角度は約12度ずつ広がっていく。そして約29.5日目に360度（0度）の角度になり⁽⁴³⁾、月は一週遅れで再び太陽と同時に昇るようになる。この日が新しい新月である。新月から新月までの期間を朔望月とよぶ（朔は新月、望は満月のことである）。太陰暦は29.5日の0.5日をゆったりとったりして、30日からなる大の月と29日からなる小の月を組み合わせ、12朔望月（約354日）を1年とする⁽⁴⁴⁾。

さて、以上の基礎知識を踏まえて、「三日目にある女神の昇る時に。」を読み直すと、「三日月の月の出に」という意味になり、時刻は朝の9時頃ということになる。既に太陽が昇っているのに、東の地平線に薄っすらとした細い三日月を見つけるのは楽ではなかったかもしれない。また月の移動速度は意外と早く、2分間で月一個分の距離を移動するので⁽⁴⁵⁾、うかうかしているとタイミングを外すことになっただろう。その間に三つ首の神像をモミの神棚に納めなければならなかったのである。さて、月に関する説明が長くなったが、話を儀式に戻そう。

【3】儀式

さて、先述したように、三つ首の神像をモミの神棚に納めた後、それに続いて一連の儀式が行われなければならなかった。まず「そしてそれを好きな場所に据えてから、」 καὶ καθιδρύσας αὐτό, εἰς ὃν προαίρη τόπον, (3147行)。「それに額が白い野生のロバを捧げなさい、そして(それを)焼き尽くしなさい。」 θύε αὐτῷ λευκομέτωπον <ὄν>ἄγριον καὶ ὀλοκαυστοῦ. (3148-3149行)。問題は <ὄν>ἄγριον の解釈である。Liddell & Scott によれば、ὄναγριον は ὄναγρος の指小語で、ὄνος ἄγρος すなわち「野生のロバ」を意味する⁽⁴⁶⁾。PGM の訳は Wildesel(?) 「野生のロバ(?)」である (S.175)。一方 GMP は wild/ [falcon?] 「野生の／ハヤブサ？」と修正し (p.99)、註釈で PGM IV. 2396 とその註を参照するよう指示している (p.99, n.421)。PGM IV. 2396 も客寄せの魔術であり、同じく <ὄν>ἄγριον (S.146) を犠牲に捧げ、焼き尽くすことを命じている。その訳も同じく Wildesel(?) 「野生のロバ(?)」 (S.147) である。GMP の註によれば、どちらの原本にも ἀγριον (「野生の」) としか書かれておらず、どうやらそれに Jacoby が <ὄν>ἄγριον 「野生の<ロバ>」を補ったらしく、Eitrem は ἄγριον κριόν 「野生の雄羊」と補ったようだ (p.82, n.304)。そうすると PGM は Jacoby の補いを踏襲したことになる。一方 GMP は「ハヤブサ？」を補ったが、古代ギリシア語で「ハヤブサ」は ἰέραξ あるいは κίρκος で、どうしてそのように修正したのか説明がない。Salayavá も、根拠は述べていないが GPM の訳を踏襲して falcon with white face 「顔が白いハヤブサ」と訳している⁽⁴⁷⁾。何となくアメリカの国鳥ハクトウワシを思い浮かべさせるが、ハクトウワシは確かに肉食性を持っているものの、アメリカ大陸にしか生息していない⁽⁴⁸⁾。一方、ハヤブサも高度を飛翔し、急降下して獲物を捕らえるものの、獲物は主に鳥であって魚ではなく、また頭部が白いとは記述がなかった⁽⁴⁹⁾。ミサゴについては既に述べたが、南極大陸以外の全ての大陸に生息する渡り鳥で、確かに頭部が白い⁽⁵⁰⁾。しかし本来的に頭部が白い犠牲獣に関して、頭部の白いものを指定するのは不自然である。本来的に頭部(正確には額)が白くないのに白いからこそ、犠牲獣として価値があるのである。以上の理由から、著者(前野)は「野生のハヤブサ」説には懐疑的である。結局のところ、はっきりとした答えは見つからないが、もしかしたら ἀγριον 「野生の」に

後ろから ovov「ロバ」の省略形 ov が接続して αγριοov となり、重複する二番目の ov が落ちたのかもしれない。Salayavá 自身も述べているように、魔術の犠牲獣として最も多いのはロバであり、方法としても丸焼きが最も多く、ロバが多い理由は、神話的な理由であろうが、もっぱらエジプトで馴染みのある家畜であり、価格も安かったことにある⁽⁵¹⁾。わざわざ「野生の」という限定がついているのは、「家畜の」と対比されているからであろう。場所も時代も違うがイソップ寓話集（前6世紀）にも、野生のロバと家畜のロバが対話する話がある⁽⁵²⁾。大プリニウス（1世紀）によれば、野生ロバの大群はアフリカに産したらしい（Plin. *HN*, 8, 108）⁽⁵³⁾。従って筆者（前野）は PGM と同様に、<όν>άγριον とは「額に白い斑点がある野生のロバ」と解することとする。「焼き尽くしなさい」όλοκαυστοῦ は「燔祭」⁽⁵⁴⁾、すなわち犠牲獣を黒焦げになるまで焼いて神に捧げることである。

「またそれに、初めて子を産み初めて乳を与えた黒牛の乳を注ぎなさい。」σπένδε δὲ αὐτῷ γάλα βοὸς μελαίνης πρωτοτόκου καὶ πρωτοτρόφου（3149-3150行）。この訳は牛の説明部分において PGM や GMP の訳と異なる。当該部分の PGM の訳は von einer schwarzen, als Erstgeburt geworfenen und großgezogenen Kuh「初子として生まれ、そして育てられた黒牛の」であり（S.175）、GMP の訳は of a black cow, the firstborn [of its mother] and the first she suckled 「[[その母牛の] 初子であり、それ（＝母牛）が最初に乳を飲ませた黒牛の」である（p.99）。つまりいずれの訳によっても、黒焦げのロバに注がれる乳は、初子として生まれた黒牛の乳となる。これは牛の質を限定する解釈と呼べるだろう。そうだとすれば、初子として生まれた黒牛の乳なら、若い牛の乳であろうが年老いた牛の乳であろうが、乳の質には限定がないということになるだろう。しかし乳は神に対する供物の一部であるから、乳の質こそ限定されるのが自然ではないだろうか。πρωτοτόκου という語を PGM は「初子」と捉えているので、その形容詞の辞書的な形は πρωτότοκος「最初に生まれた」である。またそれに似た形容詞として πρωτοτόκος「初めて子を生んだ」がある⁽⁵⁵⁾。両語の違いはアクセントの位置だけだが、パピルス文書にはアクセントは書かれないので、どちらの意味で取るかは読み手の判断ということになる⁽⁵⁶⁾。一方 πρωτοτρόφου という語は辞書にないが、πρωτο は同じく「初めて」で、τρόφου は τρέφω「育てる」に由来するので、文脈から判断して「授乳する」と訳していいだろう。そうすると当該箇所を「初めて子を産み初めて乳を与えた黒牛の」と修正することも可能となる。この訳だと、神に捧げられる乳の質が限定されることとなる。すなわち、ある若い黒牛が最初に出した乳ということである。ところで、額が白い黒焦げのロバに黒牛の白い乳が注ぐ行為には、何か白黒の色に意味が潜んでいるような気がするが、その意味は分からなかった。

「そしてそれと共に食事して、体内に納められたパピルスに書き込まれた名を、それに向かって一晩中歌いなさい。」καὶ συνευωχοῦ αὐτῷ ἐπάδων αὐτῷ δι' ὅλης

νυκτὸς τὰ ἐν τῷ πιττακίῳ ἐγγεγραμμένα ὀνόματα, τῷ ἐν τῇ κοιλίᾳ κατατιθεμένῳ. (3150-3153行)。「それと共に食事して」συνευωχοῦ αὐτῷ (3150-1行)の「それ」とは守り神の像を指し、「共に食事して」の原意は「饗宴に同席する」であるから、黒焦げのロバの肉が守り神に捧げられた食事だとすれば、共に食事をするということは、この肉を食べるということになるだろう。ロバの肉が食べられるのか知らないが、黒焦げの肉はとても苦かったはずである。これを食べるのは難業であったに違いない。また「歌いなさい」と訳した ἐπάδων という語の意味合いは「(楽器の伴奏に)あわせて歌う」⁽⁵⁷⁾なので、単に呪文を唱えるだけではなく、鐘や太鼓などを叩きながら節をつけて賑やかに唱えられたのかも知れない。「**またその神棚にオリーブの冠を載せなさい。**」στεφανοῦ δὲ τὸ ναῖσκάριον ἐλαῖνῳ, (3153-3154行)。オリーブの枝で作られた冠は、オリンピア競技祭の優勝者に授与される賞品であるので⁽⁵⁸⁾、間違いなく商売における勝利／成功を予祝したものなのだろう。「**かくて(あなたは)一生、成功するでしょう。**」καὶ οὕτω <εὐπορήσεις> διὰ βίου. (3154行)。以上は、作成した守り神の力を起動するための儀式であり、この儀式は、三日月が水平線に昇る9時頃から始まり（実際には人形づくりは、そのずっと前から始まっていたはずである）夜明けまでほぼ丸一日がかりで行われたのである。この儀式を行わなければ、それはただのに人形に過ぎないのだろう。

そしていよいよオープンの日がやって来た。「**またその同じ呪文をもう一度、夜明けに目を覚まして、開店前に歌いなさい。**」τὸν δὲ λόγον πάλιν τὸν αὐτὸν πρωτὶ ἐγερθεῖς, πρὶν ἀνοίξης, ἔπαδε. (3154-3156行)。「開店」ἀνοίξηςは、新しい商店あるいは神殿のオープンを目指す。そして「その同じ呪文をもう一度、夜明けに」唱えるのは、オープン当日の早朝のことであり、守り神を設置した日とは別の日である。そうでないと先に出た「一晩中」(つまり、夜明けまで)と「夜明けに目を覚まして」が矛盾することになる。

【4】呪文

「さて、書かれそして唱えられる名は以下の通り。」ἔστιν οὖν τὰ γραφόμενα ὀνόματα ταῦτα καὶ διωκόμενα· (3156-3157行)。これがあの三つ首の神の名ということなのだろう。「名」ὀνόματα と複数形で書かれているのは、個々の名に意識があるからだろう。ταῦτα は、辞書的には、既に述べたものを指すが⁽⁵⁹⁾、ここでは次に来るものを指している。

「ピコー

βιχω

ピコービ

βιχωβι

ムール

μουρ

スールフェオー

σουρφεω

スーマルタ

σουμαρτα

アケーモルトーウート

ακημορθουθ

コーピベウ	ムーレート	アニミ
χωβιβευ	μουρηθ	ανιμι
ナススーニンティ	アニモケオー	ミムヌーエール
νασσουναινθι	ανιμοκεω	μιμνουηρ
ヌータイト	アルバエール	イエーリ
νουναιθ	αρπαηρ	ιηρι
	サニ	アニミ
	σανι	ανιμι
		ミムニメウ]
		μιμνιμευ (3158-3164行)

この名の配列に注目すべきである。これが「素晴らしい連行魔術」PGM XXXVI. 134-160で言及された πλινθία「魔法陣」（138-139行）の具体的なイメージを表していると考えられる。隠された本当の名前を呼ばれて召喚された諸力は、このように魔法陣の上に居座ったと考えられたのであろう。ここに列挙されている諸力の名の意味は、いずれも不明である。

【5】祈願文

「[私に全ての愛顧、全ての成功を与えて下さい。] δός μοι πάσαν χάριν, πᾶσαν πρᾶξιν· (3165行)。「愛顧」と訳した語はPGMでは ἄριν (3165行) となっているが、これは明らかに χάριν の脱字である。「なぜならば運命の女神の眷属である幸運をもたらす天使が私とともにあるからです。」 μετ' ἐμοῦ γάρ ἐστιν ὁ ἀγαθοφόρος ἄγγελος παρεστώς τῇ Τύχῃ. (3165-3167行)。冒頭の μετ' ἐμοῦ「私とともに」は、筆者による修正である。この箇所は、PGMでは μετ' ἐσοῦ とあり (S.176)、訳は mit dir「あなたとともに」となっている (S.177)。GMPの訳も同じく with you「あなたとともに」である (p.99)。しかし σύ の単数属格は σοῦ であり、ἐσοῦ という形は辞書に見当たらない。一方 ἐγώ の単数属格は ἐμοῦ (前接語は μοῦ) である。そもそも意味を考えると、幸運をもたらす天使が「あなたとともに」いて、どうして私に幸運がもたらされるのだろうか。幸運をもたらす天使が「私とともに」いるからこそ、私に幸運がもたらされるのではないだろうか。従って μετ' ἐσοῦ は μετ' ἐμοῦ の誤植であると筆者は判断した。「運命の女神」Τύχῃ は、良くも悪しくも人生における突然の変化を司る女神される⁽⁶⁰⁾。その眷属たる「幸運をもたらす天使」ἀγαθοφόρος ἄγγελος については具体的なことは今回分からなかった。それは単数であるが、その名が方陣の上に配置された18の名の連なりということなのだろう。

「それ故にこの家に収入、成功を与えて下さい。」 διὸ δός πόρον, πρᾶξιν τοῦτω τῷ οἴκῳ· (3167行)。「この家に」 τοῦτω τῷ οἴκῳ は当然、住宅や家庭ではなく、商売繁

盛の守り神が安置された商店や神殿を指す。「げに、希望の主人よ、富を与えるアイオーンよ、聖なるアガトス・ダイモンよ、全ての愛顧とあなたの託宣を成就させて下さい。」 ναί, κυριεύων ἐλπίδος, πλουτοδότα Αἰών, ἱερὲ Ἀγαθὲ Δαίμων, τέλει πάσας χάριτας καὶ τὰς σὰς ἐνθέους φήμας.' (3167-3170行)。ναί は、「はい」という意味で、「(強い断定を示す)、確かに、本当に」を示す⁽⁶¹⁾。「アイオーン」Αἰών は、「時代」や「永遠」を意味する神である⁽⁶²⁾。「アガトス・ダイモン」Ἀγαθὸς Δαίμων は、乾杯の時に呼びかけられた神のあだ名のようなもので、しばしば蛇の姿をした家の守り神と認識された⁽⁶³⁾。日本の古い家屋における蛇の守り神のようなものなのだろうか。Pereira によれば、アガトス・ダイモンは守護神としての性格を持つ故に、サラピス(オシリスと聖牛アピスの合成)と同一視され、サラピスは「富／幸運の神」god of fortune でもあったので「富／幸運の女神」Good Fortune (テューケー)とも関連して、イシスとサラピスと同一視されるようになり、アガトス・ダイモンはまたヘルメス(トト)の息子ともされたという⁽⁶⁴⁾。

φήμας にはそれだけで「神託」の意味があるが、それに ἐνθέους「靈感を受けた」という形容詞が付いていて、「靈感を受けた神託」ではなくどいので、φήμας を「言葉」と訳し、「靈感を受けた言葉」、すなわち「託宣」と訳した。「成就させて下さい」τέλει は 2 人称単数の命令形なので、「希望の主人よ、富を与えるアイオーンよ、聖なるアガト・ダイモンよ」は、おそらく三柱の神々ではなく、同一の神の呼び方を変えただけであろう。

[6] 効果

「そうしてから開店しなさい。」εἴτα ἄνοιγε, (3170行)。いよいよ新しい商店のオープンである。もちろん神殿も含む。「すると(あなたは)無比なる神の力に腰を抜かすことでしょう。」καὶ θαυμάσεις τὴν ἀνυπέρβλητον ἱερὰν δύναμιν. (3170-3171行)。「腰を抜かすでしょう」は θαυμάσεις の訳であるが、これも宣伝文句なので少々大げさに訳してみた。

5. おわりに

商売繁盛の守り神の像は、オシリスとその仲間たちの集合体であり、その名は体内に埋め込まれた長い呪文であり、幸運をもたらす天使、希望の主人、富を与えるアイオーン、聖なるアガトス・ダイモンとも呼ばれた。その神像を手でこねて作り、三日月が昇る頃にそれをモミの神棚に納めなければならなかった。そのタイミングはわずか2分ほどである。それから額の白い口バを丸焼きにし、初子を産んだ黒牛の乳を振りかけて、その肉を神とともに食し、神の名を朝まで唱えなければな

らなかった。そしてオープン当日の早朝にも同様の呪文を唱えなければならなかった。富や名声を得るためには、並大抵の努力では済まなかったのだなということがよく分かったが、それにしても、例えばの話であるが、予言の神アポロンを祀る神殿がオープンしたとして、その名声が高まることを願って、神殿の目立たない所に例の不気味な守り神の像が祀られていたとしたら、なんだか可笑しい気がする。これが「古代宗教」のリアリティということなのだろうか。

本研究はJSPS 科研費 JP26370859の助成を受けたものである。（平成26～28年度「古代ギリシア・ローマ世界における呪詛板の研究」課題番号26370859の成果の一部である）。

註

- (1) 前野弘志「『ギリシア語魔術パピルス』を読む」『西洋史学報』42、[2015]、20頁のPGMの目次no.74「愛顧を得る魔術」と同じ文書。
- (2) 管見の限りで知り得た当該魔術文書に関して言及した主な研究としては年代順に、①『モーセの第13書』の解釈に関連して、魔術者が自分で作った神像と共食する事例として言及したもの（Monika Amsler, *Meals, and Magic: Eating for Revelation in the Eighth Book of Moses (PGM XIII / Leiden I 395)*, *T&T Clartk Handbook to Early Christian Meals in the Greco-Roman World*, Bloomsbury Publishing, London / New York, [2019], p.330, ただし出典がPGM I, 3125-3171となっているが、PGM Iは347行までしかないので、PGM IVの誤植だろう）、②文学作品などでは一般に魔術は夜に行うものとされるが、PGMでは朝日の力を利用した魔術も少なからずあることを指摘したもの（Andrea Salayová, *Aspects of Temporality in Greek Magical Papyri, Greco-Latina Brunensia*, 23, [2018], p.181-194）、③魔術に使う犠牲獣の種類や色に関する記述の中で言及したもの（Andrea Salayová, *Animals as Magical Ingredients in Greek Magical Papyri: Preliminary Statistical Analysis of Species, Greco-Latina Brunensia*, 22, [2017], p.199）、④コプト語とギリシア語のバイリンガル文書の中で、特定の日に儀式を行うことを命じた文書の一つとして言及したもの（Edward O. D. Love, *Code-Switching with the Gods: The Bilingual (Old Coptic-Greek) Spells of PGM*, Walter de Gruyter, GmbH, Berlin / Boston, [2016], p.125, n.3）、⑤テラコッタ製の小像との関わりで、ロウ製の小像の一例として言及したもの（Catlín E. Barrett, *Terracotta Figurines and the Archaeology of Ritual: Domestic Cult in Greco-Roman Egypt*, Stéphanie Huysecom-Haxhi / Auther Muller, (éds.), *Figurines grecques en contexte: Présence muette dans le sanctuaire, la tombe et la maison*, Septentrion Presses universitaires, [2015], p.410, p.411, n.82, n.83）、⑥三つ首の守り神の姿が大英博物館所蔵の貴石に刻まれた意匠と似ているという報告を紹介し（Korshi Dosoo, *Rituals of Apparition in the Theban Magical Library*, Diss. PhD, Macquarie University, Sydney, [2014], p.181）、エジプトにおけ

るロウ人形は動くとされたが、PGMのロウ人形は動かないとされた点を指摘し (Dosoo, *op.cit.*, p.188, n.829)、人形作りに関する PGM は 4 点と少ないのに (PGM XII. 96-106; PGM IV. 2359-2372; PGM IV. 2373-2440; PGM IV. 3125-3171) PDM はもっと多いことから、PGM におけるこの種の文書は、恋愛魔術などとは異なり、文書群の所有者のみの使用が前提とされていたのではないかと推測するもの (Dosoo, *op.cit.*, p.212)、⑦アガトス・ダイモーンの作り方に関して言及したもの (Ronaldo Guilherme Gurgel Pereira, *Cult and Belief in Ancient Egypt, Proceedings of the Fourth International Congress for Young Egyptologists*, New Bulgarian University, Sofia, [2014], p.51, n.3)、⑧魔術による様々な空間保護の一つとして私的な家の保護について言及し、三つ首の守り神の姿が大英博物館所蔵の貴石に刻まれた意匠と似ていることを指摘したもの (Christoffer Theis, *Magie und Raum: Der magische Schutz ausgewählter Räume im Alten Ägypten nebst einem Vergleich zu angrenzenden Kulturbereichen*, Mohr Siebeck, [2014], S.356)、⑨パピルスに文字を書いてそれを食べることによって知識を身に着ける理論を当該文書に当てはめたもの (Daniele Tripaldi, *Lo Spirito e la memoria: esperienza “profetica” e ricordo di Gesù nell’ Apocalisse di Giovanni*, Università “Alma Mater Studiorum” di Bologna, [2007], p.62-63)、⑩崇拜や儀式に関する語彙集の中で当該文書に言及したもの (Vassilis Lambrinoudakis / Jean Ch. Balty, (eds.), *Thesaurus Cultus et Rituum Antiquorum (TheSCRA)*, The J. Paul Getty Museum, Los Angeles, [2005], p.301) などがある。

- (3) 18枚の全紙を真ん中で折って36枚のフォリオ (Blätter, feuilles, leaves, 葉) が作られる。それらが重ねられて (72ページの) 冊子が作られる。この文書に関する PGM の解説には、この文書が全紙を二つ折りにしたものを重ねて製作されたと明記されている (S.64)。
- (4) transversa charta とは、パピルスの巻物を縦長に使って文字を記録する様式を指す (Roger S. Bagnall (ed.), *The Oxford Handbook of Papyrology*, Oxford University Press, [2009], *Books in Antiquity: The Volumen and the Codex*, p.21-22)。
- (5) この巻のメタデータについては、PGM, Bd.I, S.64-66; GMP, p.xxiii を参照した。TM に記載は見つけられなかった。
- (6) PGM には Bl. 33^v のマークの次に Bl. 34^r のマークがなく Bl. 34^v のマークになっている。Bl. 33^v のマークと Bl. 34^v のマークの間隔は他の箇所の間隔と比べて倍あるので、おそらく Bl. 34^r のマークは書き落とされたのだろう。
- (7) ἐπάν = ἐπεὶ ἄν, → ἐπεὶ ἄν + subj. 「(現在のことに) 関して) ~する時はいつでも」、上掲『ギリシャ語辞典』、ἐπεὶ, 398頁。ἐάν = εἰ ἄν, → εἰ ἄν + subj. 「(未来における実現可能性のあることを示す) もし~するならば」、上掲『ギリシャ語辞典』、εἰ, 311頁。
- (8) κεῖμαι 「置かれている」は、τίθημι 「置く」の受動態として使われる (古川晴風『ギリシャ語辞典』大学書林、[1989]、κεῖμαι, 607頁。)
- (9) 上掲『ギリシャ語辞典』、δέ, 819頁。
- (10) 上掲『ギリシャ語辞典』、οὗτος, αὐτη, τοῦτο, 811頁。
- (11) 榎原吉之助訳『プリニウス書簡集』講談社学術文庫、[1999]、271-271頁。

- (12) ロウについては、*DKP*, Bd.5, [1979], Wachs, K.1343-1344を参照した。
- (13) 中野定雄／中野里美／中野美代（訳）『プリニウスの博物誌』II、[1986]、927頁。
- (14) 上掲『ギリシャ語辞典』、*παλαιστή*、819頁。
- (15) 上掲『ギリシャ語辞典』、*πλάττω*、819頁。
- (16) バードライフ・インターナショナル（総編集）『世界鳥類大図鑑』山岸哲（日本語版総監修）ネコ・パブリッシング、[2007]、181頁、187頁；白井祥平（編著）『世界鳥類名検索辞典』英名編、原書房、[1992]、362頁；内田清一郎／島崎三郎『鳥類学名辞典』東京大学出版会、[1987]、422頁。
- (17) 中野定雄／中野里美／中野美代（訳）『プリニウスの博物誌』I、[1986]、435頁。
- (18) イアン・ショー／ポール・ニコルソン『大英博物館 古代エジプト百科事典』内田杉彦（訳）、原書房 [1997]、ホルス、504頁。
- (19) *GMP*, p.339, Thoth; 吉村作治（監修）『蘇るツタンカーメン』日本テレビ、[1984]、115頁。上掲『大英博物館 古代エジプト百科事典』、トト、367-368頁。
- (20) 上掲『ギリシャ語辞典』、*χείρ*、1195頁。
- (21) 吉村作治（編著）『古代エジプトを知る事典』東京堂出版、[2005]、53頁。
- (22) この文書で作るように指示された三つ首の蠟人形と全く同じ図像が刻まれた貴石が発見されている（BM Inv. G 191 (EA 56191)。表面には、包帯が巻かれたミイラが描かれ、それは右から左に向けてジャッカルの頭、ハヤブサの頭、トキの頭を持っており、両腕は胸の前に付けてあるが、「王笏」を持っているかどうかは細かすぎて不明である。また裏面には、当該文書にあるのと同じ呪文「BIXW / BIXWBE / YBEYXWB / IXWBIBE / YCOYMA / PTA」が刻まれている。（Theis, *op.cit.*, S.357, A.191; cf. Dosoo, *op.cit.*, p.181）。
- (23) 岸本道夫『古代オリエント』世界の歴史2、河出書房新社、[1968]、181頁、186頁。
- (24) 上掲『大英博物館 古代エジプト百科事典』、ホルス、504頁。
- (25) 上掲『古代エジプトを知る事典』、124頁。
- (26) 上掲『古代エジプトを知る事典』、81頁。
- (27) 上掲『古代エジプトを知る事典』、205頁。
- (28) *GMP*, p.99, n.419。
- (29) *GMP*, p.339, Thoth。
- (30) 上掲『大英博物館 古代エジプト百科事典』、アヌビス、18頁。
- (31) 上掲『古代エジプトを知る事典』、79頁。
- (32) 上掲『蘇るツタンカーメン』、112頁。
- (33) 上掲『大英博物館 古代エジプト百科事典』、ハトホル、421頁。
- (34) 上掲『蘇るツタンカーメン』、117頁。
- (35) 上掲『蘇るツタンカーメン』、112頁。
- (36) 上掲『大英博物館 古代エジプト百科事典』、オシリス、95頁。
- (37) 大プリニウスは、磁石の不思議さや産地、色などについて語っているが、その魔術的な性格については述べていない（Plin. *HN*, 34, 147-148, 126-130, 192, 37, 48-61）。
- (38) 上掲『プリニウスの博物誌』II、664頁、665頁、671-672頁、693頁、694頁、698頁、699頁。
- (39) ギリシア語のセレネは、天体としての月も女神としての月も指す（*GMP*, p.339, Selene）。

- (40) 月と暦については、白尾元理『月のきほん』誠文堂新光社 [2017]、8-62頁；池田圭一『まなびのずかん 天文学の図鑑』技術評論社 [2015]、28-31頁；岡田芳朗／神田泰／佐藤次高／高橋正男／古川麒一郎／松井吉昭（編集）『暦の大辞典』朝倉書店 [2014]、22-29頁；米山忠興『空と月と暦 天文学の身近な話題』丸善株式会社 [2006]、33-71頁を参照した。小論の図版はこれら図書に掲載されていたいくつかの図版を元に著者が作図した。
- (41) 上掲『暦の大辞典』27頁。
- (42) 実際には地軸の傾きによって28分から78分くらい大きく変化する（上掲『空と月と暦』39頁）。
- (43) 既に述べたように、月の公転周期は約27.3日なのに、新月から新月までの朔望月が29.5日で2.2日の差が出る理由は、月が地球を公転する間に地球も太陽を約12分の1公転するからである（上掲『天文学の図鑑』31頁）。
- (44) 太陽年の周期に基づく太陽暦の1年（約365日）と約11日のズレが生じ、放っておくと暦と季節のズレが生じるので、それを修正するために様々な置閏法（定期的な閏日、閏月などを設けること）が考案されたが（上掲『暦の大辞典』26-27頁）、魔術には関係ないのでここでは論じない。
- (45) 上掲『月のきほん』51頁。
- (46) Liddle & Scott, [1996]⁹, ὀνάγγριον, ὀνάγρος, p.1230.
- (47) Salayavá, *op.cit.*, [2017], p.198.
- (48) 上掲『世界鳥類大図鑑』、190頁。
- (49) 上掲『世界鳥類大図鑑』、186頁。
- (50) 上掲『世界鳥類大図鑑』、187頁。
- (51) Salayavá, *op.cit.*, [2017], p.197-198, Fig.2, Fig.3.
- (52) 山本光雄訳『イソップ寓話集』岩波文庫、改版 [1974]、264「〈野生の驢馬と馴らされた〉驢馬」、205-206頁。
- (53) 上掲『プリニウスの博物誌』I、367頁。
- (54) 上掲『ギリシャ語辞典』、ὀλόκαυτος、777頁。
- (55) 上掲『ギリシャ語辞典』、πρωτότοκος、πρωτοτόκος、966頁。
- (56) PGMはπρωτοτόκουを「初子」と理解したのだから、アクセントの位置はπρωτότοκουとしなければいけなかったのではないだろうか。
- (57) 上掲『ギリシャ語辞典』、ἐπάδω、391頁。
- (58) OCD⁴, [1996], Olympian Games, p.1066.
- (59) 上掲『ギリシャ語辞典』、ὅδε, ἦδε, τόδε、764-765頁。
- (60) OCD⁴, [1996], Tyche, p.1566.
- (61) 上掲『ギリシャ語辞典』、ναί、741頁。
- (62) GMP, p.331, Aion。
- (63) GMP, p.331, Agathos Daiom: OCD⁴, [1996], Agathos Daimon, p.38。
- (64) Pereira, *op.cit.*, p.51。

(広島大学文学研究科)